

沖縄の集落における子育ての共同組織に関する研究（その5） —名護市・仲尾次幼稚園の元保育士からの聞き取り—

嘉納英明*

A nursery school study in the community of Okinawa (V) —Interview with former nursery teacher—

KANO Hideaki

要旨

上地富子は、戦前から夏季休業中の時には、字仲尾次の季節保育にかかわりを持ち、戦後は、公民館から子どもの世話を依頼された。当時の公民館幼稚園の保育士は、無資格者が圧倒的に多く、保育士の手当は、保護者と集落の負担であった。仲尾次の公民館幼稚園の保育士は上地のみであったが、運動会やお遊戯会等の幼稚園の行事は、住民の理解と協力により運営された。

キーワード：集落 子育て 保育士 字幼稚園

1. はじめに

戦後沖縄の集落共同社会では、子育ての教育組織として字（区）立の幼稚園が設立され、就学前の幼少の子どもたちの保育・教育活動を担っていた。筆者は、これまで名護市の宮里幼稚園を事例として取り上げ、同園の設立の背景や活動状況について（元）保育士や保護者からの聞き取りを行ってきた。宮里幼稚園の事例によって明らかになったことは、保育・教育活動を担っていた保育士と保護者の関係が良好に築かれ、字公民館の理解と協力によって運営されてきたことであり、また保護者にとっての同園の位置づけは、単に子どもを預ける施設としてとらえられているのではなく、保護者と保育士の交流の場であり、保護者の居場所的な機能を有していたことであった⁽¹⁾。さらには、幼稚園の保育士は、かつては名護町の幼稚園会を組織化し日常的に個々の園活動の交流と促進を図ったり、合同運動会を実施した

* 公立大学法人 名桜大学国際学群教授

りすることで、ひろく地域教育実践活動を積み重ねてきた⁽²⁾。その意味でも、幼児園会は、就学前の保育・教育活動の充実を進め、保育士の資質の向上に大きな貢献をしてきた。

ところで、名護の市街地からやや離れた集落ではどのような教育活動が営まれてきたのであろうか。小稿は、当時の名護町と隣接していた羽地村の仲尾次集落の公民館幼稚園（のちに幼児園）に注目する。戦後の公民館幼稚園で活動していた保育士は高齢化のため聞き取り調査は困難になりつつあり、また物故された方も少なくない。今回、公民館幼稚園の時代から幼児園に移り変わるまで保育士として活動された、上地富子（昭和3年生）さんの協力により戦後の仲尾次の幼児教育の実相の一断面を描くものである。なお、インタビューの内容は、文章化し、本人と内容の確認を行った。

本稿では、以下、戦後の仲尾次の状況と字幼稚園の成り立ちの背景を素描したのち、上地富子さんへの聞き取りの内容を記述した。

2. 沖縄戦後の仲尾次の状況と字幼稚園

(1) 戦後の仲尾次

字仲尾次は、名護市街地から北東へおよそ6 kmの位置にある。集落の北寄りを国道58号線が東西に走り、南東の山の手寄りに公民館、神アシャギ、拝所等がまとまり、北西には景勝地羽地内海がある。仲尾次は、明治期には羽地間切（村）の経済、交通、文化の中心地として栄え、馬場、旅宿が設立され、港には山原船による交易もあった。大正期には、ブラジル移民や日本本土への炭坑出稼ぎ、紡績出来稼ぎも盛んであった。集落内には、入院室を兼ね備えた二つの医院があり、大通りには、旅館・宿泊所、ソバ屋、ダンパチ屋（理容室）、風呂屋、写真屋、本屋、質屋、郵便局、駐在所等もあった。住民は、生活に必要な品々は集落内で事足りる状況であり、生活に不便さを感じることはなかった。とりわけ、住民にとって身近な施設は、村屋（むらや一、公民館）であり、字仲尾次の公民館は大正14年に現敷地に移設され、アマデー瓦（屋根の裾周りを瓦で葺き、上部の方を茅葺にする方法。資産家の自宅は同じ工法が採用された）作りであった。この村屋は、戦災を生き延び焼け残ったが、1951年（昭和26）、木造瓦葺の区事務所（公民館）に代わった。この区事務所は、仲尾次農協の初代建物となり、さらにその後公民館広場に移設され、仲尾次幼稚園の園舎となっている。区事務所（公民館）が仲尾次幼稚園の場となったのは、農協の建物として活用された後であるが、実際の戦後の幼児を含む子どもの教育活動は、戦後初期から始まっていた。『仲尾次誌』は、次のように描写している⁽³⁾。

昭和20年6月末、沖縄戦終結で山を下りた人々は、焼け野が原と化した集落で放心状態にありながらも子供たちの教育を心配した。仲尾次の中心地（348番地ミーヤ付近）に米軍が設置した収容施設（野戦テント）を利用し、幼児や児童を集め、手づくりの教材、教具を利用して教育にのり出した。

また、上地富子さんに取材した新聞記事には、次のような記述がある⁽⁴⁾。少し長いが、引用しておく。

上地さんは昭和21年、名護高校の前身である田井等高校の一期生として卒業すると同時に仲尾次部落の幼稚園の先生になった。現在人口が約一千人しかいない同部落は、当時戦争で山原に避難していた中、南部の人たちが寄り集まり、園児も7、8百人にふくれあがっていたという。先生も12、3人いたようだが、避難民がだんだん引き揚げ、先生は上地さん一人になった。その後も戦前の公民館を利用し、部落の4、5歳児を対象に、一人で幼児教育に心血を注いできた。

4年前に真喜屋小学校に幼稚園ができたのに伴い仲尾次部落の幼稚園はなくなってしまったが、同部落は総会で幼稚園にかわるべき幼児園の開設を決め、引き続き上地さんに子供たちの世話を頼んだ。上地さんの幼児教育にかけるこれまでのひたむきな姿が部落の人たちの心をとらえ、部落経営の幼児園が誕生したわけで、現在、3、4歳児を対象に23人（男11人、女12人）の子供たちを預かっている。

上地さんは子供たちと一緒に歌や遊戯、折り紙を折ったりして毎日仲よく遊んでいる。教育信条の一つに自然とたわむれることをあげ公民館の裏山で子供たちを思う存分遊ばせている。

戦後の早い時期から、仲尾次の集落では、幼少の子どもを対象とした活動が始まり、その後、公民館を活用しての幼稚園や幼児園につながるが、この点は、次節の上地富子さんの聞き取り内容でも確認することができる。なお、仲尾次では、戦前、農繁期の忙しい時期に保育活動が行われていたが（季節保育）、戦後も、公民館幼稚園として復活・再生したのである⁽⁵⁾。

(2) 仲尾次の公民館幼稚園

戦前戦後の仲尾次の公民館幼稚園に関する資料は、上述の『仲尾次誌』等に限られ、散逸しているが、仲尾次の集落を含め沖縄全域の「幼稚園に類する幼児施設調査」が1963年に琉球政府文教局により実施されている。同調査は、仲尾次を含め羽地村の公民館幼稚園の実態について報告している⁽⁶⁾。

「幼児施設調査」によると、羽地村内には、13の施設が字に存在し（そのうちの1園は、教会に設置）、仲尾次幼稚園は、最大の園児数である。各園とも1クラス1保育士である。年齢別の幼児数をみると、3歳児5名、4歳児13名、5歳児27名、6歳児以上45名、計90名である。一人の保育士が90名の園児を世話している状況である。保育時間は午前9時から12時までの午前中であり、ミルク給食もあった。他の多くの公民館幼稚園がそうであったように、区長は幼稚園の園長を兼ねていたが、仲尾次幼稚園の場合も同じであった。また、保育士の手当は、区の負担と保護者負担である。仲尾次幼稚園の場合、園舎は専用であり（12坪）、

園に隣接して図書室がある。遊具として、滑り台、ぶらんこ、砂場があり、オルガン、紙芝居用具、絵本、蓄音機もあり、当時の公民館幼稚園としては整備がなされていた。

3. 聞き取りの内容

被インタビューー 上地富子（昭和3年生） 仲尾次出身

調査日 2017年9月26日（火）於：高齢者向け住宅 あかがーら（名護市）

嘉納 本日は、貴重な時間を割いて頂きまして、ありがとうございます。上地さんが、長年、仲尾次の幼稚園と幼児園の保育士をしていたこととお聞きしまして、今回、ゆっくり話を伺いたいと思い、こちらに来ました。また、上地さんの娘さんも同席頂き、大変感謝致します。では早速ですが、いくつか、質問させてください。上地さんは、仲尾次の出身ですか。

上地 はい。私の生まれは仲尾次で、育ちも仲尾次ですね。羽地の小学校を卒業して女学校に行きました。戦前は、一高女、二高女、三高女とありましてね。ここには、三高女があったんですよ。自宅から自転車で通っていましたよ。学校まで二里の距離がありました。結構な道のりでした。試験前になると、片手でハンドルを持って、もう片手で教科書を持って走って。私は、昭和17年に三高女に入学して、戦後、田井等地区にあった田井等高校（現在の名護高校）の卒業になったんですね。入学は三高女だったんだけど、戦争があったので、卒業は今の名護高校になったんですね。もう、入り混じっているね。

嘉納 上地さんの仲尾次の子どもの関わりのきっかけとは、何だったんですか。

上地 戦前、女学校に通っていた時、部落の農繁期には、子どもを集めて世話していましたね。午前中は、子どもたちを遊ばしていました。親は、田んぼ、キビもありましたからね。女学校では、子どもの世話の仕方とか、色々勉強していましたので、夏休みには、部落で子どもの世話をしたんですよ。私たちには夏休みはなかったですよ、子どもの世話をしたりしたので。当時の女学生は、夏休みは、自分の部落で子どもの世話をよくしていましたね。

嘉納 戦争が終わって、公民館の幼稚園で働くようになったきっかけは、何だったんですか。

上地 戦争が終わると山から下りてきました。戦争中は山の中で隠れていましたから。部落に下りると、あちこちから来た避難民でいっぱいでした。最初、川上の集落に下りてきて、親戚の世話になって、そして仲尾次に来ましたけど。うろ覚えですけど、幼稚園で働くようになったのは、公民館から頼まれて少し始めたんだと思います。沢山の人がいて、子どももたくさん。何クラス何クラスと、本当にいっぱいありました。私は女学校を卒業していないんだけど、幼稚園の先生をしていたんですね。だけど、昭和22年に結婚して、夫が税務署に勤めていて、那覇に転勤になったので那覇の壺屋に移り住みました。しばらくは仲尾次から離れました。

戦後、幸運にも、公民館は焼け残っていました。仲尾次は戦争でほとんど焼け野原になっ

ていて、私たちの家も公民館の側にあったんですが焼けて。この娘は、公民館幼稚園で久場川沢子先生にお世話になりました。那覇で生活をしていたけど、仲尾次に両親がいるので、4年ぐらいして、仲尾次に戻ってきました。しばらくしてから、また公民館の幼稚園で働きましたね。仲尾次に戻ってきた頃に、真喜屋にあのチリ地震と津波があったんですよ。あの津波で何名か、亡くなっていますよね。

嘉納 当時の保育士の給料はどのようにしていましたか。

上地 給料は公民館からです。最初は、子どもたちから保育料を集めて、それが私たちの給料だったんですが、お金の扱いはイヤだったので、「公民館をお願いします」ということで。取れる家庭と取れない家庭があったんですよ。それで、保育料の袋は、私たちが渡して、子どもたちは公民館に納めるようになった。あの頃は、持ってこない子も何人もいましたよ。徴収した分の給料だけだったので、これじゃだめなので、公民館が徴収するようになった。字費と一緒に、字費の中に入れてですね。真喜屋や稲嶺の子どもは少ないけど、仲尾次は多かった。だけど、給料はあんまり変わらなかった。

嘉納 幼稚園での歌とか踊りとかは、どこで勉強したんですか。

上地 女学校で学んだことをしましたよ。いつも、羽地とかの保育士と集まって。ちょっとした勉強会みたいなものもありました。

クラスがいくつもあるときには何名も先生がいましたが、避難民が少なくなっても、それなりに子どもがいて、それを一人で世話するんだから、大変でした。子どもは泥んこになって滑ったりして楽しいし、地面の穴から蟬が出てきて興奮して一緒に見たりして。仲尾次は自然がいっぱいだから、自然の遊びをしていましたよ。子どもたちは毎日遊んで、お尻は泥がついて、家に着いたらお母さんに怒られるかと思ったら、「いっぱい遊んで上等」とか言われて。お母さんも喜んで。仲尾次には大きい森と小さい森があって、そして自然の滑り台があって、子どもは大変好きで。川にはウナギがいて。湧水がたくさんで。

嘉納 子どもの保育時間は午前中だけでしたか。

上地 そうですね。午前中だけの活動でしたね。お母さんと一緒に公民館に来たり、一人で歩いてくる子もいたし。朝は泣いて公民館に来るけど、帰りは、お母さんが迎えに来るもんだから喜んだりして。みんな、子どもによって違うね。戦前は、夏休みの間だけ子どもの世話をしていたけど、戦後は、毎日ですよ、日曜日はないけど。親は畑仕事だから、その間に子どもを預かっているわけ。朝、幼稚園に来たら、「お時間ですよ、お時間ですよ、早く早く、みんないらっしゃい、みんないらっしゃい」という歌を歌って。オルガンを弾いてですよ。

嘉納 幼稚園の行事には、どのようなものがありましたか。

上地 お遊戯会とか、運動会とかありました。運動会は、真喜屋と稲嶺も一緒になって。真喜屋小学校に公立の幼稚園がない頃は、仲尾次と真喜屋と稲嶺の子どもも一緒になって、小学校で運動会をしましたよ。3つの部落の幼稚園が合同で運動会。でもだんだん、稲嶺

も真喜屋も子どもが少なくなって。あとは、仲尾次に子どもが来るようになって。真喜屋と稲嶺から来る子どもは少なかったですね。運動会は、この仲尾次の公民館の広っぱでして、盛大でしたよ。部落の人がみんな見に来るもんだから。名護町では、町内の幼稚園が一緒になって運動会をしていることは聞いていましたよ。町の幼稚園で働いている保育士さんがいて、その人と時々会って、話をしていたもんだから。

嘉納 運動会等の行事は、上地さん一人で教えたんですか。

上地 一人で教えましたよ。でも、いろんな人が手伝ってくれてね。お遊戯会の服なんかは保護者が考えて作ったりして。踊り用のレコードもあって、仲尾次には、貴重な蓄音機もありましたから。レコードの音に合わせて、歌ったり、踊ったり。

嘉納 幼稚園の行事には、運動会やお遊戯会以外には、どんなものがありましたか。

上地 幼稚園では、遠足もありました。仲尾次の隣に仲尾という部落がありまして、そこに短いトンネルがあって、そこに行ったりしました。今でもありますよ。仲尾のトンネル。また、真喜屋の小学校にもよく行きましたよ。

嘉納 真喜屋小学校に幼稚園が出来た後、仲尾次に幼稚園が出来ましたね。それは、どうしてですか。

上地 幼稚園は5歳までの子どもたちの世話をしていました。真喜屋に幼稚園が出来たから、5歳の子どもたちは学校幼稚園へ行って、3歳とか4歳とかは、幼稚園で。そんな感じになりました。復帰前の写真では、まだ真喜屋に幼稚園が出来てないもんだから、子どもの数は多いでしょう（写真左、1972年3月）。右後ろの建物は公民館。幼稚園になると、子どもの数は少ないね（写真右、1983年3月）。



嘉納 手元に、琉球政府が幼稚園を調査した資料がありまして、これによると、1963年の頃の仲尾次の公民館幼稚園の子ども数は90名。これを一人で世話していたのは大変だっただろうと思います。もちろん、毎日、90名の子どもが出席したわけではないかと思いますが。この資料に、上地さんの当時の年齢が書いていますね。

上地 そうですか。あの頃の公民館には図書室もできて、そこには、戦前からの残っていたものかな、もらったものかな、本がありましたよ。子ども用の漫画もありました。あの頃

はですよ、フクギの葉っぱ、木の葉っぱがいっぱいなんですよ。今は少なくなっているけど。朝、子どもと葉っぱ拾いをしてから、活動を始めるんです。鞆をおいて、掃除をして。
嘉納 公民館にはオルガンもあったんですよ。

上地 オルガンはですよ、仲尾次の駐在所の宮城益一郎巡査が募金等を集めて。宮城巡査は、元々北中城村出身でしたが、当時はここで勤めていましたね。とても部落のことを考えて、やってくれましたよ。何でも聞いてくれました。どこの部落よりも遊具はそろっていましたね。幼稚園の遊具も、寄付とか色々ありました。また、ミルク給食もあって、ミルク炊きの人がいて、脱脂粉乳のもの。當間トミおばさんよ、いくらか公民館からもらっていたはずよ。毎日、ミルク給食ありましたよ。子どもたちは、大変、喜んでいました。

嘉納 真喜屋小学校に幼稚園が出来たとき、公立園で働かないかという話はなかったですか。中部の具志川では、公民館の幼稚園の先生で、資格を持っていた人は、公立の幼稚園で採用したこともあるんですが、その辺りの話は聞いてないですか。

上地 私は幼稚園の資格もなくてずっと公民館幼稚園で働きました。公立の幼稚園の先生として採用の話は特になかったですね。でも、何かしら、辞令があって、その内容はよく覚えていません。昭和61年ぐらいまで、仲尾次で働きました。その頃は、まだ名護市ではなくて羽地村だったんだけど、村から補助金もありました。でも、保育園とか幼稚園とか、色々できたので、幼児園はなくなりました。

嘉納 公民館幼稚園の時代を振り返ってみて、いま、どのような気持ちですか。

上地 公民館の幼稚園の先生はとても楽しかったですね。子どもたちが喜ぶのを見て、本当に嬉しかったですね。部落の人にも支えられて、本当に楽しい日々でした。

嘉納 今日は、貴重なお話が聞けて大変嬉しかったです。時間を割いて頂き、ありがとうございました。

4. 聞き取りを終えて

仲尾次集落は、羽地村の経済や交通、文化の中心的な場所であり、戦後、捕虜の収容施設が建設されたこともあって、住民は増え、幼少の子どもの数は激増していた。そのため、戦禍を免れた公民館を活用しての幼児教育がいち早く開始された。上地富子さんは、戦前、夏休みの時には仲尾次の季節保育にかかわりを持ち、戦後は、公民館からの依頼で子どもの世話を頼まれることになる。当時の公民館幼稚園の保育士は、有資格者はほとんど存在せず、集落の若い女性に依頼されることが多かった。上地さんの場合も同様であった。保育士の手当は、保護者と集落から充てられた。仲尾次の公民館幼稚園は、上地さんひとりで多くの子どもの世話をするが、運動会やお遊戯会等の幼稚園の行事も、住民の理解と協力により運営されていることが証言から伝わってくる。また当時、公民館幼稚園でミルク給食が実施されている点は、興味深い。ミルク給食の業務にかかわった當間トミさん（大正9年生、仲尾次在住）は、当時をふりかえり、「アメリカーミルクが公民館に配給されていたので、毎日、

このミルクの粉をお湯で溶かして幼稚園の子ども達にあげた。ミルクを作る場所は、公民館の隣の青年部屋だった」と述べている（2017年12月25日、於：當間宅）

公立幼稚園の整備が始まり、その入園対象者が5歳児になったあとも、3～4歳児の子ども保育の場所として、公民館幼稚園から幼稚園へと名称を変えて存在してきたことは、仲尾次の集落で果たしてきた公民館幼稚園の役割が住民に評価されていた証左であり、一方で、沖縄の就学前教育・保育環境は十分な整備状況になかったことを物語るものである。公私立園が不十分な時代に、集落の子どもを集落の公民館で保育してきたことは、“地域の子どもは地域で育てる”ことを文字通り実践してきたものだといえる。

<注及び引用文献>

- (1) 嘉納英明「沖縄の字幼稚園を支える保護者の意向—一名護市・宮里幼稚園の保護者アンケート調査の分析から—」（九州教育学会『九州教育学会研究紀要』第44巻、2016年、所収）、嘉納英明「沖縄の集落における子育ての共同組織に関する研究（その1）—一名護市・宮里幼稚園の保育士からの聞き取り—」（沖縄大学地域研究所『地域研究』第19号、2017年3月、所収）、嘉納英明「沖縄の集落における子育ての共同組織に関する研究（その2）—一名護市・宮里幼稚園の保護者からの聞き取り—」（沖縄大学地域研究所『地域研究』第19号、2017年3月、所収）、嘉納英明「沖縄の集落における子育ての共同組織に関する研究（その3）—一名護市・宮里幼稚園の元保育士からの聞き取り—」（沖縄大学地域研究所『地域研究』第20号、2017年12月、所収）を参照のこと。
- (2) 嘉納英明「沖縄の集落における子育ての共同組織に関する研究（その4）—旧名護町の字幼稚園の合同運動会史—」（沖縄大学地域研究所『地域研究』第21号、2018年4月、所収）参照のこと。
- (3) 仲尾次誌編集委員会編『仲尾次誌』1989年、107頁。
- (4) 「沖縄タイムス」1979年9月26日。
- (5) 仲尾次豊年踊120年祭記念事業実行委員会記念誌部編『仲尾次豊年踊120年祭記念誌』2012年、108頁。
- (6) 琉球政府文教局義務教育課「1963年9月10日 幼稚園に類する幼児施設調査 北部連合区」沖縄県公文書館所蔵：資料コード「R00095609B」。

[本調査は、科学研究費補助金（課題番号：16K04560）による成果の一部である]